

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東第四堂の調査(飛鳥藤原第142次)

都城発掘調査部では、藤原宮中枢部の構造を解明するために大極殿院・朝堂院の発掘調査を続けています。前号でも紹介したとおり、今年度は朝堂院の東西に6棟ずつ並ぶ建物のうち、最南の南北棟である東第四堂の調査をおこなっています。5月は例年よりも雨が多かったものの、一転して6月は晴天に恵まれ、調査は順調に進みました。7月前半には東第四堂の南半部のほか、朝堂院を取り囲む東面回廊の一部まで拡張して調査を終えました。

東第四堂の南半部は後世の耕作によって建物の基壇の高まりも残らないほど削平されていました。しかし、礎石を据えるための穴に石が詰められた状況や、建物を解体する際の足場穴を確認し、東第四堂の規模が推定できました。また、以前の東第三堂の発掘調査では、最も東側の5列目の柱穴を建設途中で埋めてしまうという設計変更が確認されました。しかし、今回の東第四堂ではそのような痕跡が認められず、北半の調査に課題を残しました。さらに、東第四堂の東側には、東第二堂や東第六堂などで確認できた造営段階の排水溝がありません。これらの調査所見から、建物を建てる順番や造営前の地形などによって、それぞれの朝堂で施工方法が異なっていたと推測できます。

東面回廊の残存状況も朝堂の南半部と同様、あま



調査区全景(人の立つ場所が東第四堂の柱位置)

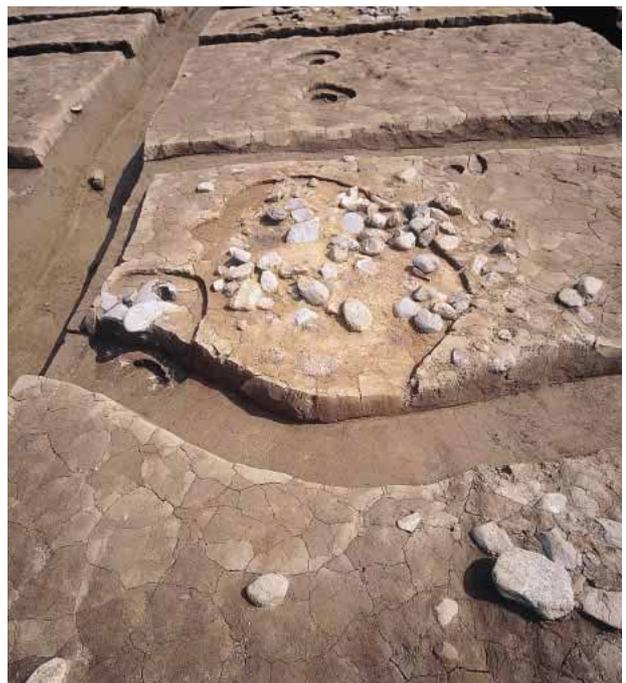
り良くありません。基壇の高まりや礎石の据付痕跡は残っていませんでした。ただし、回廊の内側では雨落溝を、外側では雨落溝に先行して掘られた下層溝を確認し、回廊の位置と幅を確定できました。さらに、回廊の外側では完成時に埋め立てられる大規模な溝を確認しました。今回の調査区の南隣に位置する第128次調査では、この溝から5000点以上の木簡が出土しています。今回も木簡出土を期待しましたが、残念ながら削屑木簡が1点出土したのみです。

私にとって今回が初めての藤原宮跡の調査担当でした。耕作溝の深さや整地土と地山の判別の難しさなど、これまで調査してきた平城宮跡とはまた違った難しさがありました。7月からは東第四堂の北半部の調査が始まっています。南半部の調査では解明できなかった点が明らかになることに期待しています。

(都城発掘調査部 豊島 直博)



東面回廊外側の溝の掘り下げ状況



東第四堂の礎石据付痕跡と足場穴